

「家がいいね」 第139号

いせ在宅医療クリニック 広報月刊紙

2015. 12. 8

私たちも、人生の船長なのです！

伊勢志摩の街と海が好きだった方の遺作展に行きました。悪性腫瘍に片腕を取られても絵筆は離さず、自宅での生活を続けられました。人生半ばから始められた油絵には余韻が感じられました。陸に上げられ草むす船の絵も、生活を想像させ寂しい感じだけではありません。老夫婦の視線も喜びと誇りに満ちています。



誰の人生も近海を行く船のように考えたことがあります。昔から海図は無くとも、山や島の形を確かめつつ船を進めたのでしよう。ウツで生気を失ったものの、精気が戻ってきた方に「船長復帰だね」の言葉を贈ることがあります。自ら天候を読み、困難であっても舵をとる勇気の回復をたたえます。

橋をかける 子供時代の読書の思い出



終戦時10歳の子であつた、この方が本から得た「喜び」「根っこ」「想像力」と「翼」を読んでみてください。その力で、外に内に橋をかけるように自分の世界を広げたと述べられます。結婚後、3人の子を育てられる時に、自らの中の小さな子の魂が、様々な橋をかけつつけてゆかれたのでしよう。3女のために童話を作られ、まごみちおさんの童話の英訳に静かに尽力された経緯も知りました。国際会議スピーチでのお言葉です。
「本への感謝をこめてつけ加えます。読書は、人生のすべてが、決して単純でないことを教えてくださいました。私たちは、複雑さに耐えて生きていかなければならないということ。人と人の関係においても。国と国との関係においても。」

食べられなくなる前まで、「ごちそうさま

人の手持ちのエネルギー在庫は、どれくらいだと思えますか。飲まず食わずなら、元気な人でも3日間で底を尽きます（大災害時に救急援助隊が何とか72時間で救出しようとするのは、その根拠に基づいているからです）。身体の機能が落ち食べられなくなった時も数日の余力を残すだけと思ってください。その先は個々の気持ち優先です。11月11日には、介護者のための食事介助教室を開催しました。当日は、8名の参加があり、嚥下機能や食べるコツを、講師を囲んで学びました。生きるということは、他者の命を摂取しながら生き長らえるという原則を改めて感じました。生きるからには美味しく安全に食べ、最期の前まで「ご馳走さま」の挨拶も聞きたいものですね。

生きること、伝えること。

みえ生と死を考える市民の会のミニ講演会です。AYA世代(思春期・若年成人)のがんについて語って戴きます。講師 廣田圭さん



伊勢市出身。昭和58年生まれ。20歳の時に精巣腫瘍発症。抗がん剤治療、手術を経験。現在は、医療ソーシャルワーカーとして総合病院に勤務する傍ら、がんのピアサポーターとして活動。1児の父親となる。

2月21日(日) 13時半〜15時半。津市 三重県総合文化センター 大研修室。一般300円 会員は無料 (事前申込み不要)。

クリニックの年末年始は

12月27日(日) から新年1月3日(日) までを休診します。在宅患者さんには、その間も相談と対応をお約束します。



自宅での人生を 最期まで支援します

〒516-0805 三重県伊勢市御園町高向 927
電話 0596-20-8104
ファクス 0596-20-8105
メール homecare@kr.tcp-ip.or.jp
ホームページ http://isezaitaku.com

↑バックナンバーはここで閲覧可